四　郷土を愛する【郷土を愛する態度 C（16）】

丸谷金保

一九七六年十月三日、ワイン城前の広場は、五千人を超える人たちでにぎわいました。昨夜からの雨がうそのように上がり、十勝晴れの青空の下、ブルガリアの国際ワイン・コンクールで、十勝ワイン（赤）が大金メダル、十勝ワイン（白）とブランデーが銀メダルを受賞した祝賀パーティが開催されました。祝賀パーティには、ブルガリア大使も、十勝ワインへの賛辞を送るため、メダルを持って出席しました。

〔池田町ブドウ・ブドウ酒研究所所蔵〕

この日の前日、池田町議会では、丸谷町長が辞意を表明し、この祝賀パーティは、丸谷町長の送別会にもなりました。

「ワイン町長」の愛称で親しまれた丸谷金保が町長に就任したのは、一九五七年のことでした。

当時の池田町は、一九五二年の十勝沖地震と、二年続きの冷害で町税の収納率が大きく低下し、国から「*財政再建団体」の指定を受けていました。丸谷は、慢性化した財政赤字に苦しむ町を、「赤字を二年間で返済する」と訴え、見事、町長に当選したのでした。

丸谷が町の再建として始めに手がけたのは、ブドウ栽培でした。

池田町の風物詩といえば、真っ先に思い浮かぶのがコクワと山ブドウでした。丸谷は、子どものころ、かごを手にして山に入り、山ブドウをいっぱいとってきては、口のまわりを紫色に染めながら、たらふくほおばったのでした。

「そうだ！ブドウでいこう！」

一九六一年、山梨県から苗木を導入し、町民の希望者全員に分配しました。丸谷は、ブドウが農家の庭先や空き地に植えられ、ブドウの房が池田町のあちこちでたわわに色づき、この町の景色が一変することを想像しながら、町のイメージチェンジを図ろうとしたのでした。

一九六四年、北海道全域が厳しい冷害に襲われました。春過ぎから天候の不順が続き、秋の気配が兆す頃になると凶作が決定的となりました。各家庭に配付された素人が栽培するブドウなど、生き残れるはずがありませんでした。

「何が新しい町の産業としてのブドウづくりだね。こんな寒いところでブドウが育つはずがないよ。」
このような非難は丸谷の耳にも届きましたが、表だった反論はしませんでした。
ブドウの木が全滅したことで、町長への風当たりは厳しくなりました。しかし、そんな中、ブドウづくりを応援し続けた人たちがいたのでした。それは、「ブドウ愛好会」の農業青年たちでした。
「ゆくゆくは池田町の山林をブドウ畑にしようじゃないか。眠っている山林を活用すれば、池田町の農業は必ず復活する。」
丸谷の言葉に賛同する農業青年や町の職員は、ブドウ栽培について勉強し、品種の改良に努力を重ねました。
ある日のこと、ブドウ栽培の指導に来ていた専門家が、池田町の山ブドウを手にしながらこう言いました。
「池田町の山ブドウは、貴重なアムレンシス系統かもしれないよ。」
アムレンシス系のブドウとは、ロシアのアムール川流域が原産地で、良質のワインの原料となり、日本には自生していない品種とされていました。
「よおし、ワイン造りでもやってみるか。」
農業が*基幹産業であった池田町では、豊作のときは農作物の値段が低くなり、いわゆる「豊作貧乏」と言われるように、農家の収益が不安定になることが課題でした。丸谷は、ワイン造りを始めれば農家の収入をぐっと安定化できると考えたのでした。
「ワインは豊作のときのブドウを原料にしたほうが良質のものができ、価格も高い。なるほど、豊作貧乏の心配もないわけだ。」
こうして、町民の理解も少しずつに得られ、池田町のブドウづくりとワイン造りが始まったのでした。
一九六四年の秋、池田町のワイン「第一号」をハンガリーの首都ブダペストで開かれる国際ワイン・コンクールに出品することとなりました。ワインには「十勝アイヌ山葡萄酒」と即席で名付け、ボトルにはワラ半紙に*ガリ版で間に合わせたラベルを貼り付けました。
折しも、冷害の痛手が深刻な事態を迎え、ブドウ畑が全滅し、「町長にだまされた。」と丸谷への風当たりが強い最中、池田町のワインが見事入賞したのです。
大喜びの丸谷たちは、受賞したワインをさっそく町民に飲

んでもらいました。

ワイン造りの危機を逃れた丸谷は、冷害ショックを克服するための次なる手を考えていました。それは、この冷害のため、完熟しなかったブドウを活用するブランデー造りでした。

ブドウの酸が強くないとよいかおりが出ません。完熟しないブドウで造ると良質になるブランデーに、丸谷は目を付けたのでした。

「豊作の年はワインを造り、作況の悪い年はブランデーを造る。ブランデー造りが軌道に乗れば、これで池田の農業が安定する。鬼に金棒だ。」

こうして、丸谷はブドウづくりを推し進め、一九六四年には「池田町ブドウ・ブドウ酒研究所」を設立し、日本で初めての自治体ワイン「十勝ワイン」を誕生させました。

一九七〇年には町営レストランを開業させ、四年後には「ワイン城」を完成させるなど、関連の事業を次々と軌道に乗せ、池田町と「ワイン町長」は全国的に知られる存在となりました。

丸谷が、自身の送別会となった受賞祝賀パーティの中で、お別れの挨拶をすると、「乾杯！ワイン町長！」と誰かが叫びました。「乾杯、乾杯」と大勢の人が応えてくれている様子を見て、丸谷はただ茫然と壇上に立ちつくしたままでした。ワインで酔ったほほに涙が流れました。

丸谷は、池田町を根底で支えてきた町民一人一人と、この充足感を共有できたことに感謝していたのでした。

「ワイン城」〔池田町ブドウ・ブドウ酒研究所所蔵〕

＊財政再建団体…収入を大きく上回る赤字を抱え、自力では再建できなくなり国の指導・監督を受けることとなった地方自治体

＊基幹産業…一町の経済を支えている重要な産業

＊ガリ版…謄写版原紙と呼ばれる薄い特殊な紙に小さい穴をあけ、この穴から印刷インキを押し出して印刷する方法

◎　丸谷町長にとって、町づくりの原動力は何だったのでしょう。

◆　あなたはこれまで、地域を大切にする取組をした経験はありますか。